

체Ⅱ부      연구보고  
第Ⅱ部      研究報告

# 韓国の初等英語教育のあり方から学ぶこと

英語教育専攻 英語科教育学領域

修士1年 佐野 貴子

[요지]

한국 초등영어교육의 자세에서 배우는 것

영어교육 전공 영어과교육학 영역 사노 다카코 (석사 1)

한국에서는, 초등 영어 교육이 정규 교과로서 도입되고 있었다. 이번 연수에서, 진주 교육대학교 부설초등학교의 영어과 수업을 관찰할 수 있었다. 한국 초등 영어 교육 수업을 관찰하는 것을 통하여, 그 특징을 밝히고, 일본 초등학교에 영어 교육을 도입하기 위한 과제와 가능성을 고찰했다.

## 1.はじめに

今回の Educational Cultural Mission to Korea 2005 に参加した目的は、日本よりも一足も二足も先に正規教科として初等英語教育が導入されている、韓国の初等英語教育を視察し、これからの日本の英語活動または英語学習のあり方を再考察することであった。現在、日本は小学校での英語を英語学習として行うか、それとも、英語活動として行うべきか論議されている。そこで、韓国の現状と日本の現状を比較し、韓国の初等英語教育の特徴を明らかにし、今後日本への導入の可能性を考えていきたい。

## 2. 授業観察より

2005年9月8日に附設小学校の授業を見学させてもらった。そこでは第4学年の第5課 Who is she?が行われていた。

この授業観察で3点に焦点を当てて考察してみたいと思う。まず、教材として、授業を通して一度もアルファベットの提示がなかった。また、韓国の学校施設の特徴とでもいえる、大型テレビに教師が操作するコンピュータ上の活動が映し出され、それに合わせて生徒は活動を行っていた。第2に、教員の役割が挙げられる。英語専科の講師とクラス担任との TT が附設小学校のスタイルではあったが、クラス担任の授業にかかわる姿勢も、教員によりさまざま、率先してサポート役を務めている先生も見られれば、反対に後部で児童の様子をみている先生も見られた。最後に、児童の英語理解度は、生徒によってさまざまであった。しかし英語学習二年目としては、十分に英語のシャワーを浴びて、ALT に返答していると言える。生徒の中には、語学留学を経験している生徒もいた。このような授業で見た英語学習の上達振りは、附設ならではだからかもしれない。

### 3. 韓国の現状

韓国では、1997年度第7次教育過程より初等学校3学年から英語が正規教科として導入された。教育人的資源部が今後の国際化、および情報化時代における必要性を考慮して始められたが、導入される前段階として、1982年度より特別活動の一環として英語が短時間ではあったが教えられていた。

教育人的資源部が掲げる英語学習の目的として、5点が挙げられる。その中でも特に、英語に興味と自信を持ち、意思疎通ができる基礎能力を養うこと、に重点がおかれている。

英語学習を正規教科として遂行するに当たって、教材が必要となる。教材として、画一的な教育を目指すための国定教科書と、その教科書に準じたCD-ROMとで授業が展開されている。その授業のフォローアップとして、ワークブックがあり副教材として音声だけを聞くことができるテープやCD-ROMもある。教科書は、生徒の言語発達に伴い、提示されている技能も異なる。今回観察した第4学年の教科書は、第3学年とは相違し、簡単なアルファベットや単語を読むという学習が導入されている。

正規教科として英語学習を行う以上、評価をしなければならない。評価は担当教員による観察が中心の遂行評価形式で行っている。つまり、小集団授業での児童の相互観察、教員の観察、自己評価、および課題遂行能力などで、記述的に長所を中心に評価されている。

初等だけにかかわらず、英語教育の向上のため、英語担当の教員対象にさまざまな教員研修が奨励され、種類も国内研修、夏・冬休み集中研修、海外インターンシップ研修、また研修講師も大学教授からネイティブとさまざま、研修の参加ごとのポイント制になってこのポイントが昇進にも有利になるようである。

### 4. 日本の現状

現在、英語活動は総合的な学習の時間、つまり国際理解教育の一環として、2002年度から始まった。英語活動をしなければならないという規定はないが、一部特区認定された40の自治体の公立小学校は英語を正規の教科として導入している。全国でみても、9割近い公立小学校が、英語学習を実施しているというのが、現状である。

英語活動の目的は、言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成を狙うことが重要であると謳っており、言語習得を目指す英語学習、英語教育ではないことがここで指摘されている。

現在、英語活動の指揮をとっている教員には5つのパターンがある。しかし、じきに文科省はHRTつまり学級担任が英語活動を運営していく計画である。総合的な学習の時間の国際理解教育の一環として英語活動を行っているため、現在は英語活動において数値的評価は、なされていない。教員研修は文科省の研修支援プログラム、小学校英語活動研修だけでなく、各市町村の教育委員会主催でも行われている。

公立小学校英語教育の是非が問われているが、独自にカリキュラムが構成できる私立学校の英語活動を考察してみる。愛知県下、唯一の私立小学校の椋山女学園大学附属小学校

では、1952年の創立以来、英語を第1学年より正規教科として実施している。しかし、英語科の教員研修は実施されていない。評価は、観点別評価であり、たとえば、4年生では英語に親しみ進んで学習しようとするという観点で評価される。5年生では、読んだり書いたりという観点が増える。椙山小学校の生徒の実態は、4、5年生の72%が英語塾に通塾しているようで、生徒に英語が英語学習という視点で浸透してきていると考えられる。この数値はまだ椙山小学校だけにしかいえないことであるが、他の公立小学校にも同じことが言及できるのか興味深いところである。

## 5. 問題点

このようにして、韓国と日本の現状を比較して、いくつか日本に欠如している点を見つけることができた。それらは、まず、韓国のような画一的また斬新な教材を開発し、全国の学校に教材機器を普及させるのには、膨大な資金が必要となることだ。また、研修などを受講し、資質ある教員が不足していると思う。先に取り上げたが、韓国に比べ日本は研修がまだ必須化されていないため、資質が劣っているのではないだろうか。第三に、日本は完全週休二日制である。来年から韓国も隔週で週休二日はじまるようである、日本がこのような状況下で、英語を正規教科として導入していくとしたら、何の時間を縮減させ、指導時間の確保をどのようにするかが、問題になると考えられる。最後に、正規化されていないため、現在行われている英語活動は、各学校の裁量によって実施されている。よって、どのようなガイドラインを規定し、今後正規化する際、韓国のような一貫性を保持していくのかは、今なお定かではない。

しかし、今回韓国の初等英語教育を観察させていただき、何点か疑問を持った。韓国の教材には驚かされたが、果たして、このように教科書をあまり用いず、生徒が大型テレビを眺めながら授業を受けるという体系は、生徒がどのように学習した内容を短期記憶から意思疎通ができるようになるくらいまでの、長期記憶にまで導くことができるのだろうか。単なるその場だけの短期的な記憶で終わってしまうような気がした。また、一年を通して教科書がパターン化されていて、毎回同じパターンでは生徒にとって、次は何をやるのかな、というワクワクする気持ちが希薄化していくように感じられる。そうなることによつて、授業全体が受容的な授業となっていく可能性があると考えられた。

## 6. 今後の展望

今後の展望として、今回は晋州教育大学校附設小学校のALTが行う授業を基に考察してきたが、今後は一般公立小学校で、どのようにクラス担任が授業を展開しているのか、また附設小学校と一般校ではどの分野がどのように相違しているのかを、掘り下げて調査していきたいと考えている。また、韓国で一斉に行われている、初等英語教育の基盤でもあるといえる教員の資質がいかん養われているのかを、現地調査を踏まえ、研修内容を熟慮し、日本への導入の可能性を検討していきたいと思う。

## 日韓の伝統音楽教育 -カリキュラムと教科書比較から-

芸術教育専攻 音楽科教育学領域

修士1年 桐山 佳子

[요지]                   한일 정통 음악 교육 - 커리큘럼과 교과서 비교  
                                예술교육 전공 음악과교육학 영역   기리야마 요시코 (석사 1)

일본의 음악 교육에 대한, <<세계의 민족음악과 전통 음악>>이 주목받게 된 것은 오래 됐다. 과거의 학습 지도 요령을 보면, 쇼와 22 년의 제 1 회 고등학교 학습 지도 요령(시안)으로 <<각국의 민요나 일본 고대의 음악도 접촉하여 친숙하게 지내게 한다>> 라고 이미 명기되어 있다. 세계화에 대응하는 형태로 국제 이해의 도구로서의 음악 교육, 게다가 일본인으로서의 아이덴티티를 기르자는 의미로의 전통 음악 교육, 이 둘은 키워드라고 할 수 있다. 본 보고에서는, 2005 년 9 월에 행해진 아이치 교육 대학과 한국의 진주 교육 대학교와의 교류 프로그램으로의 성과를 음악 교육의 시점에서 보고함 동시에, 쌍방의 음악 교육의 문제점, 서로 참고로 해야 할 점을 고찰하려고 한다.

### 1. 音楽教育における伝統音楽と国際理解 -日韓の現状-

「国際化と伝統音楽」は昭和 22 年, 高校の学習指導要領(試案)で最初に記述されたが, その後改訂のたびに, このキーワードは登場する。(「音楽を各国及び民俗の生活, 風俗, 習慣などとの関連から考察する(昭和 35 年)」、「我が国及び諸外国の音楽文化の伝統や動向を理解させる(昭和 45 年)」)。小学校では遅れて, 平成元年の改訂で第 5 学年及び 6 学年の A 表現(3)の旋律楽器の選択について, 「和楽器及び, 諸外国の民俗楽器などの中から学校の実情に応じて選択」と明記され, 現行のものでは, 「箏や尺八を含めた我が国の音楽」と, より広義で日本の楽器を捉える表記に変わる(茂手木 2003)。このキーワードについては, 学会報告も多数あり, 研究会での実践例も多い。2005 年度の音楽教育学会や全日本音楽教育研究会では, マレー草刈り歌やイラン音楽, 西アフリカの楽器や, 義太夫節, 沖縄伝統芸能などを教材とした研究や実践が発表された。音楽教育の中での国際化について, 平成 6 年に「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律」が制定され, 法的整備もなされた。その一方, 二つのキーワードのうち「伝統音楽」に言及すると, 一般化しているとはいえない。隣の国, 韓国ではダンスをリコーダーと併用し, 伝統的アンサンブル「サムルノリ」の活動も活発で, 広く国楽教育が普及している。筆者が留学中に参加した晋州教育大学の音楽科の授業や, 現場の小学校の見学で得た印象では, 特に器楽分野での韓国の伝統音楽(国楽教育)は, 日本より盛んである。それはカリキュラムから見受けられる。韓国のカリキュラムと教科書は「教育と人的資源開発省」が標準を定め

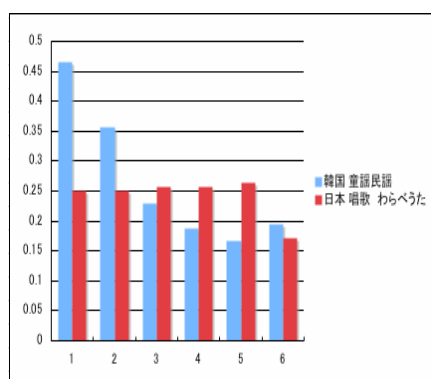
ているが、韓国のナショナルカリキュラムは1945年以来6回の改訂を行ってきた。現行のものは1997年に改定された第7次カリキュラムである。そこでは音楽科の意義として「韓国の歴史的・文化的遺産を重視した音楽教育プログラム」をあげている。カリキュラムによると、韓国の国定教科書の約35%が伝統音楽で占められ、様々な伝統楽器や民謡などのCDが教材化されており、国がいかに伝統音楽に力を入れているか分かる（日韓音楽教育・教科書セミナーより）。

## 2. 交流プログラム成果報告 教科書比較と授業見学から

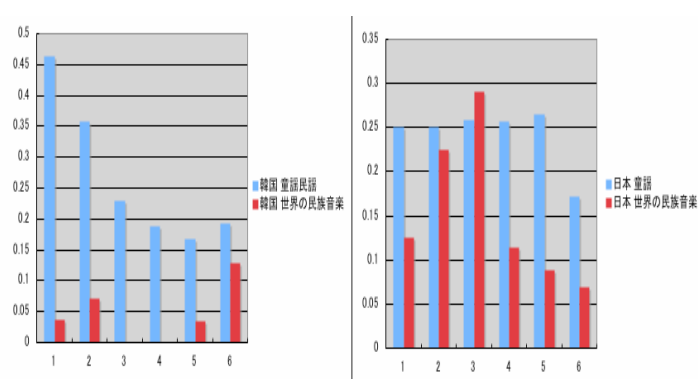
器楽分野において、韓国の国楽教育と日本のそれとの違いは明らかであるが、歌唱分野ではどうだろう。韓国の小学校の教科書は国定であり、全国で同一のものを使用している。今回、入手した教科書を用いて、歌唱教材としての伝統音楽を日韓双方の教科書から比較した。韓国は「伝統的童謡」「地域の民謡」、日本は「文部省唱歌」「わらべうた」に属するものを集計した。（資料1）

これを見ると、歌唱分野において差が見られるのは、低学年での伝統音楽の比率である。韓国の小学校では低学年で「楽しい生活」と題された教科書の中に音楽が含まれ、独立した教科書は存在しない。生活の中の遊びの延長である教材が扱われており、その比重も高い。今回のプログラムで見学した2年生の授業でも、太鼓をつかった遊びや手遊びを歌いながら行なう授業であった。こういった生活に密着した文化としての音楽を「伝統音楽」として扱うことは、日本との大きな違いである。日本では敷居の高い箏や三味線を「和楽器」として教材化しがちだが、祭り囃子や鳴子なども立派な伝統楽器である（茂手木 2003）。さらに、資料2で明らかになるのは、韓国における国際理解教育としての音楽の役割の薄さである。「外国曲」とだけ記された曲も多く、国際理解としての音楽教育にまだ発展の余地があることが伺える。

資料1



資料2



資料1 韓日の小学校教科書に占める「伝統的童謡・地域の民謡」と「文部省唱歌・わらべうた」の割合(横軸は学年)

資料2 韓日の小学校教科書に占める外国曲の割合(横軸は学年)

### 3. 考察

音楽文化の源を同じくし、国際化と言う時代に最も近い関係にある、日韓の音楽教育への姿勢の違いは、双方ともに参考となる視点を与えてくれる。「伝統音楽教育」を早くから重要視しながらも、高校から小学校におりてくるまで時間がかかり、現場での実践化に立ち後れた日本にとって、韓国の国学教育の実践はよいモデルとなり得る。また、日本の音楽教育のこの二つのキーワードが、まるで車の両輪のようにバランスを保ちながら発展してきたことと比較すると、先に述べたように韓国での「世界音楽」という視点は、あまり重要視されていないようにも感じる。内と外に向かう方向性の違いはありつつも、どちらも多文化時代を生き抜くための意義ある教育と言える。研究レベルから現場へ発展を遂げるこの二つのキーワードは、文化理解の手段としての音楽教育と、その可能性を考えるきっかけとなるだろう。

### 4. まとめ

日本の音楽教育において、「世界の民族音楽と伝統音楽」が注目されるようになって久しい。過去の学習指導要領では、昭和22年の高等学校学習指導要領（試案）で「各国の民謡や日本古来の音楽にも親しませる」と既に明記されている。グローバル化に対応するかたちで国際理解のツールとしての音楽教育、さらに、日本人としてのアイデンティティを養う意味での伝統音楽教育、この二つはキーワードといってよい。本報告では、2005年9月に行われた愛知教育大学と韓国の晋州教育大学校との交流プログラムでの成果を音楽教育の視点から報告するとともに、双方の音楽教育を現状から考察した。

#### 参考文献

- 茂手木潔子「日本の伝統音楽に親しむ」『音楽学習のフロンティア』（玉川大学出版部 2003）  
滝川達子「世界音楽で広がる音楽教育-音楽で知る人びとのくらしと文化」（同上）  
滝川達子「コア・カリキュラムとしてのワールドミュージック-世界音楽の教育的意義・日本音楽推進型を越えて-」『音楽教育学研究三 音楽教育の課題と展望』（2000）  
「日本音楽教育学会第36回大会プログラム」（2005）  
日本音楽教育学会「音楽教育学第22-2号」（1993）

# 日本と韓国の国語科教育課程に関する研究

国語教育専攻 国語科教育学領域

修士1年 岩田 祥典・修士1年 張 恩花

[요지] 일본과 한국의 국어과 교육 과정에 관한 연구

국어교육 전공 국어과교육학 영역 이와타 요시노리 (석사 1)・장 은화 (석사 1)

이번 연구는, 일본과 한국 국어과교육에 대한 비교를 목적으로 한다. 이번 연구를 통해 한·일간 국어과의 성격에 큰 차이가 있다는 것을 알았고 서로간의 새로운 인식도 많다는 것을 알았다. 연구 협력이나 교사 교류에 의해서, 일본과 한국 국어과교육은 보다 좋은 발전을 이룰 것이다.

## 1. 日本の国語科教育

本研究は、日本および韓国における国語科の特質を、指導課程や韓国での国語科授業見学(Mission to Korea 2005)から明らかにすることで、両国の国語科教育に新たな視座を提供しようと試みるものである。

日本における「国語科」の成立は1890年である。同年の小学校令施行規則によれば、国語科の要旨(教育目標)は「普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能力ヲ養」うとともに「智徳ヲ啓発」することだと書かれている。ここからは、国語科が、「智徳ヲ啓発」する一般教科でありながら、それらの基礎となる言語教育の役割をも負っていることがわかる。こうした二重の役割は、時として国語科教育の立場を不明確なものとし、同時に目標と実践との乖離を生み出してきた。この現象は国語科教育そのものの構造が明確でないことによるものだと考えることができ、これは現在においても変わっていない。

一時期、戦争遂行のため国民精神を発揚するという唯一の目標が掲げられたこともあったが、国語科全体の歴史から見れば、何のために何を学ぶ教科なのか分かりにくい時期は長かったと言える。ただ最近はこうした反省もあって、国語科も次第に変わりつつある。

現在の国語科の目標は、小学校学習指導要領(平成10年)によると次の通りである。

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」

全体に抽象的ではあるが、ここからは「言語の教育としての立場」を重要視して書かれていることがわかる。言語の教育であることを意識することによって、学習全体を系統立てることも可能になる。この傾向はしばらく続くと考えられる。

ただし、この目標はあくまでも目標であって、学校教育における国語科の意義や位置づ



けを明らかにするものではない。日本の学校教育では、特定の能力を伸ばすことよりも、各教科にわたる総合的な学力の獲得が目指されていると言える。その中で国語科の定義を求めることは、学校教育全体から見れば好ましくないのかもしれないが、公教育としての責任を果たすためにも、学校教育における国語科の役割は明確にされるべきである。

## 2. 韓国の国語科教育

韓国の国語科は、日本による占領政策の影響を色濃く残していたが、現在では非常に興味深いものとなっている。特に1997年の教育改革によって、国語科も大きな変貌を遂げている。特徴的な事柄としては、日本の国語科と比べても非常に「構造化」されていることが挙げられる。第7次教育課程(教育部告示第1997-15号別冊5)の国語の部では、次のような出だしで国語科の「性格」というものが書かれている。

「国語科は、韓国人の生が染み込んでいる国語を創造的に使用する能力や態度を育て、情報化社会において正確で効果的に国語生活を営為し、未来志向的な民族意識や健全な国民情緒を涵養しつつ、国語発展と国語文化昌達に資する志を立てるようにする教科である。(以下略)」

この「性格」は、いわば国語科の定義である。韓国の国語科はこの「性格」によって果たすべき役割が規定され、同時にこの「性格」によって教科として成立する根拠付けがなされていると言える。また、国語科は「国語生活」「話法」「読書」「作文」「文法」「文学」の6領域から成り立つものとし、それぞれに「性格」「目標」「内容」が明記されている。これにより韓国の国語科は、均一で系統立てられた教育を可能にしている。その成果であろうか、長年蓄積された教科書補助教材の完成度には特筆すべきものがある。

## 3. 両国の国語科への還元

日本の国語科は、日本の国語科は言語を扱う教科であるという傾向を強めてきた。何をどう表現させるかを重視したことで、結果として「国語(言語)によって何ができるか」が目指されてきたのだと言えよう。教科について説明する文言は一切なく、範囲が限定されていない分自由であり柔軟性はあるが、教育活動としての責任や評価は曖昧にされやすい。

韓国の国語科は、一貫して文学(時調などの詩も含む)教育を重視した鑑賞中心の教育を行ってきた。そして鑑賞には文学に関する基本的な知識などが必要とされたため、文学を鑑賞するという目標に適う準備教育が充実した。つまり「どうすれば国語活動が実現・充実するか」が目指されてきたと言える。

同じ国語科であっても、その理論や方法はかなり異なる。とはいえ、互いに資するものは多く、例えば公教育としての責任が問われている日本の国語科には評価規準(基準)の設定が急務で、その点では内容と目標を細かく関連付けて体系化している韓国が良き手本となるはずである。また、音読や発展的内容の取り扱いなど、両国共通の課題も多い。今後学生や教師の交流が活発になり、教育における相利的な効果が現れることを強く望みたい。

# 晋州教育大学校附設初等学校での授業実践報告

学校教育専攻 総合教育開発分野 国際理解教育領域

修士1年 佐方 貴文

[요지] 진주교육대학교 부설 초등학교에서의 수업 실천 보고  
학교교육 전공 종합교육개발 분야 국제이해교육 영역 사카타 다카후미 (석사 1)

나는 이번 방문 기간에 진주교육대학교 부설초등학교에서 국제교류수업을 실시했다. 이번에는 학생들에게 한국과 일본의 문화 차이점을 가르치기 위해 ‘함께 하는데…’라는 주제를 설정했다.

실제로 한국에서 초등학교에서 수업하는 것은 많이 긴장되었다. 제일 어려웠던 것은 언어문제 였다. 그렇기 때문에 자신의 생각을 정확하게 전하지 못했다고 생각한다. 그 부분의 문제점들을 해결하기 위해 그 다음 기회에는 한국쪽의 선생님과 함께 수업 계획을 하면 좋지 않을까 라는 생각이 들었다.

## 1. 国際交流授業実施の経緯

昨年の UNESCO 支援による派遣の準備段階において、教育大生ならではの交流のあり方を模索していたところ、韓国の小学校で授業をしてみてもどうかという思いつきから始まった。

昨年は文部省唱歌である「もみじ」を題材にして、国が違っても美しいものを感じる心は同じであるということを音楽の授業を通して伝えた。今年はさらにそれを発展させるかたちで国際理解教育の授業を実施した。

## 2. 主題と主題設定の理由

今回、授業をするにあたり「一緒にいるのに・・・」という主題を設定した。取り上げた資料は、日本人学生と韓国人学生という異なる文化を持つ二人が共同生活をしており、そこで生じた感覚のずれにより、結局二人は距離を置いてしまうというものである。

現在の日韓関係は、民間レベルでは急速に近づきつつある。しかしながら、政治や歴史問題など問題は山積みであるのが現実である。そんな中、これからの日韓関係を担う子どもたちに色眼鏡をかけてお互いの国や人を見るのではなく、自分の目で見て考え、判断できる子どもを育てたいという理由からこの主題を設定するに至った。

## 3. 授業の実際と反省

実際に韓国の小学校で教壇に立つことは想像以上に緊張した。それに輪をかけるように言葉の問題が重くのしかかった。一年間の留学経験があり、日常会話においては問題はな

かったものの、授業をするにはまだまだ言語能力が足りないと痛感した。児童の発言を受けて、それに的確に反応するのが非常に難しく、自分の思うように授業を誘導できなかった。しかし、普段の授業とは違った特殊な状況下ではあったものの、子どもたちは大きな声で文章を音読したり、積極的に発言をしてくれた。

#### 4. よりよい交流授業を目指して

授業終了後、5年1組の担任の先生と少し話す機会を得た。その中で、担任の先生は、言葉の関係うまく伝わらない部分があったり、わかりにくい部分もあった、この授業案で私が授業をしていたらもっとスムーズに流れたかもしれないとおっしゃっていた。この言葉を受けて、授業の質を保ち、伝えたいメッセージを正確に伝えるためには、必ずしも私が授業をしなくてもいいのではないかということに気がついた。やはり、一つの授業を考える時、掲げた目標を子どもたちにうまく伝えることが一番重である。それを実現するには、韓国の先生と共同で授業案を作成し、韓国の先生が授業をするというかたちがあるべきではないかと感じた。これから、さらにこの交流授業を発展させていくためには、持ち寄ったものを披露するという段階を越え、韓国側と日本側の「共同作業」がキーワードになるのではないだろうか。

#### 5. この授業から学んだこと

海外で教育実習をするということは、言葉はもちろん、声のトーン、顔の表情、手振り身振り、体を総動員して自分のメッセージを伝え、相手を受け入れようと必死にならなければならない、一つ間違えば誤解や不信感を生むことにもつながりかねない。常に真剣勝負と言える。全く同じことが日本で教壇に立つときにも言える。同じ言葉を話すためつい言葉に頼りきってしまっているところはないだろうか。教室にいる40人の子どもは一人ひとり違い、その子どもたちを理解するためには通り一遍のやり方ではどうにもならない。一人ひとりに常に真剣に向き合い、必死に伝え受け止め、理解をしていかなければならない。このことを再確認させてくれたこの授業、そして5年1組の子どもたちに感謝している。

## 交流の持続と共同研究への発展に向けて

学校教育専攻 教育心理学分野 教育心理学領域

修士2年 岩田 直治・修士2年 廉 香順

[요지] 교류의 지속과 공동 연구에의 발전을 위해서

학교교육 전공 교육심리학 분야 교육심리학 영역

이와타 나오지 (석사2)・림 향순 (석사2)

금년의 교류 사업은, 학생들간의 교류가 주요한 목적으로 되어있었다. 대학 축제의 참가나, 진주교육대학교 부설초등학교에서 대학원생이 처음으로 한국어로 수업도 진행했다. 또한, 두 대학의 교류가 시작된 이래, 처음으로 대학원생들의 의견교환이 진행되었다. 여기에서, 일한 교육제도나 학교 현장의 상황등을 서로 이야기 하게 되었다.

### 1.はじめに

今回の研修は、愛知教育大学と晋州教育大学校との交流の延長上にあり、昨年に引き続き大学祭での学生を主体とした学生相互の交流を中心としたものであった。同時に、昨年同様、晋州教育大学校附設初等学校での授業実践も行った。今回の研修では、大学院生も同行し、海外の協定大学での教育実習や共同研究の足がかりを見いだすことも目的となっていた。訪問した晋州教育大学校では、両大学の交流が始まって以来初めて大学院生同士の意見交換が行われた。ここでは、日韓の教育制度や学校現場の状況等が話し合われた。

### 2. 私にとっては、もう交流ではない

交流：互いに行き来すること。特に、異なる地域・組織・系統の人々が行き来すること。

また、その間でさまざまな物事のやりとりが行われること。大辞泉 1995 小学館

韓国と日本という異なる国、晋州教育大学校と愛知教育大学という異なる組織、それぞれ異なる専攻を持った学生同士、確かに交流の定義にあてはまることではある。しかし、韓国も日本もアジアの国であり、同じ教育大学であり、同世代の大学生である。少しマクロに視点を変えれば、異なることなどほとんどなくなってしまふ。逆に、少しミクロに視点を変えると、すべての個人が異なっている。すると、それは国や組織ではなく、あなたと私の問題である。筆者の一人である岩田自身にとっては、今回の研修は昨年に続いて2度目であり、個人的な訪問を含めると5度目の韓国訪問となる。晋州教育大学校からの留学生や、晋州教育大学校からの訪問時に会った友人との再会もあった。そのため、晋州の街は見慣れた景色であり、出会う人々も懐かしく感じる顔が多かった。つまり、韓国は、もう異国の地ではなく、友人の住む場所となっている。韓国は親しみ、懐かしさ、再会の地であり、“交流”という言葉とは、異なった意味を持つ場所である。当たり前に行き来しコミュニケーションする。物理的距離の近さもあるが、心理的にもより近い場所である。

### 3. 共同研究への課題と提案

今回は、大学院生としての訪問であり、前述のように、今後の両大学の関係の発展のため、共同研究のあり方を模索することが重要な目的となっていた。

愛知教育大学では、この研修の主体となった授業「日本・韓国・朝鮮・コリア」において、過去数年にわたり学生の韓国に対するイメージ調査が行われている。今回の訪問では、当初、同様の調査を韓国晋州教育大学校にて実施しその結果を持ち帰ることを計画していた。両大学での調査の比較検討は、継続的な交流の中で重要な示唆を与えてくれるものと期待していた。そして、この調査を継続的に両大学にて実施していくきっかけとしたかった。しかし、準備段階でまず言語の問題に直面した。日本において、英語以外の論文を探し、読むということが、非常に難しい。そのため、韓国語に翻訳標準化された質問紙を手に入れることができなかった。

この点を踏まえ、今後の共同研究のために提案をしたい。まず、両大学の図書館の蔵書リストの共有と、複写や相互貸し出し、研究論文を中心とした蔵書の電子化による共有である。そしてそれらを支えるインフラとしてのネットワークの構築と維持。そのネットワークの中で、学生だけでなく教員やスタッフのコミュニケーションや議論が行われれば、共同研究のきっかけや進行を助けることとなるだろう。

### 4. 最後に

今回の訪問で特に感じたことは、これまでの交流が相互のコンタクトパーソンに頼った“点”で支えられていたということである。それは、確かな絆が互いのコンタクトパーソンの中に築かれていたことの現れである反面、負担をそのコンタクトパーソンに集中させることとなっている。また、そのコンタクトパーソンが何らかの理由で大学を離れたときに、それまで築かれていたものが無に帰してしまう危険性をはらんでいる。今後は、これまでのような“点”で支える交流ではなく、両大学が互いに組織として交流を支えていける仕組みや、より容易に交流できるようなサポートを充実させていくことが必要なのではないだろうか。さらに、大学によるいわば公的な交流だけではなく、学生サークルや部活動など、より私的なレベルへ交流を広げていくことができれば“点”で支えるのではなく、有機的なネットワークとして、交流がより持続可能なものとなるだろう。

日韓両国には、未だ戦争による傷跡が残っている。戦争の記憶は残していかななくてはならないが、悪い記憶だけでは、いつまでも近くて遠い国でしかあり続けられない。本当に近い国となるために、今後は、よい記憶を残していかななくてはならない。お互いの理解や友情などの記憶を築き残していくには、交流を持続させていくことが必要だろう。

大学という場は、常に学生が入れ替わっていく。この大学という場が、交流を続けられる場であり続ければ、広い世代にお互いの記憶を残していくことができる。そして、共同研究などを通して知識や情報を共有すること、異なる文化の人と関係を続けていくことを経験することで、世界を理解する助けとなるのではないだろうか。

# 晋州教育大学校から韓国の英語教育を学ぶ

外国語教育講座

杉浦 正好

[요지] 진주교육대학교로부터 한국의 영어교육을 배우자  
외국어교육강좌 스기우라 마사요시

2004년도 과학연구비에 의해, 11월 21일부터 24일까지 한국에서의 초등학교 영어교육실시상황을 경학했습니다. 방문처는 아이찌교육대학의 학술교류학교인 진주교육대학교로 결정했습니다. 1997년부터 초등학교에서 영어를 교육과목으로써 도입하고, 외국어 학습환경이 일본과 제일 가까운 나라 한국에서, 선구적인 영어교육에 대한 성과로부터 배워야 할 것이 많다고 생각합니다. 김준석(Jung-Sook Kim)씨(진주교육대학교조교수)로부터 제공받은 한국의 영어교육에 대한 정보와, 진주교육대학교부설초등학교 및 진주시의 공립초등학교의 수업을 견학한 내용을 정리하여 봤습니다. 자세한 것은 아이찌교육대학교 실천종합센터 기요 제 9호를 참조해주세요.

## 1.はじめに

2004年度科学研究費により、11月21日(日)～24日(水)まで韓国での小学校英語の教育実施状況を視察した。八田玄二氏(椋山女学園大学教授)、野呂忠司氏(愛知教育大学教授)との共同研究である。訪問先を愛知教育大学の学術交流校である晋州教育大学校に決定した。1997年から小学校で英語を教科として導入しており、外国語学習環境が最も日本に近い韓国から、先駆的な英語教育の取り組みについて学ぶことは多いと思われる。

## 2. 韓国小学校英語教育の現況

Jung-Sook Kim氏(晋州教育大学校助教授)から提供していただいた韓国の英語教育の情報と、晋州教育大学校附設小学校及び晋州市の公立小学校の授業を見学した内容をまとめてみた。なお、詳しくは愛知教育大学実践総合センター紀要第9号を参照されたい。

### 2. 1. 授業時間数

小学校3年から40分授業を週2時間で開始され、学年進行の結果、2000年に6年生まで行われるようになった。この4年間を総括して、新たに本格的に開始されたのが2001年である。それまで週2時間であったのが、3年生と4年生は週1時間に削減された。実情は多くの小学校で裁量時間を設けて週2時間体制を確保している。なお、韓国では土曜日も現在は授業を行っているが、見直しを進めている。

## 2. 2. 教科書

1997年～2000年までは民間発行の韓国文部省認定16種類があったが、現在は国定教科書1種類である。第8次教育課程では、英語は国定ではなく検定教科書になる予定である。なお、裁量時間に実施されるプラス1時間の授業は地域で作成した教科書を使用している。

## 2. 3. 教室

約40名で日本と大差はない。日本と異なるのは、教室の教壇の上方に韓国の国旗があるのと、大型液晶テレビがどの教室にもあり、教卓から遠隔操作が可能である。

## 2. 4. 英語授業担当者

1998年度ではクラス担任と英語専任教員が英語を担当していたが、現在はクラス担任が主となっている。晋州教育大学校附設小学校ではカナダ人のALTが中心に英語授業を担当していたが、他の公立小学校では外国人教師（ALT）はほとんどいない。

## 2. 5. 教員研修

英語授業担当者であるクラス担任は、政府主導で120時間の研修が義務付けられている。

## 3. おわりに

この訪問に際して、李榮晩氏（晋州教育大学校学生部長）、鈴木眞雄氏（愛知教育大学教授）、佐方貴文氏（愛知教育大学大学院生）、新美杏奈氏（現在は知多市立旭南中学校教諭）を始め、多くの関係者から全面的な協力を得た。

# e-Learning システムによる国際交流の支援

情報教育講座

江島 徹郎・梅田 恭子・野崎 浩成

[요지] e-Learning 시스템에 의한 국제교류의 지원

정보 교육강좌 에지마 데즈로・우메다 료코・노사키 히로나리

필자들은 2002 년도부터 주로 학장 재량경비를 이용해 e-Learning 에 관한 연구를 실시해 왔다. 우선 Blog 를 중심으로 부족한 기능등을 추가한 SWMS 라고 하는 시스템을 개발 했다. 이것에 의해 본 대학의 부속 중학교 오카자키중학교나 초등학교등에 있어서의 실천연구에 이용해 일정한 성과를 얻을 수 있었다. 특히 부속중학교인 오카자키중학교나 누카타초립의 누카타중학교는 말레이시아의 스리 KL 교와의 교류 방문을 지원했다. 그리고 본 대학의 대한민국 진주교육대학교 교류 「Mission to Korea 2005」에 있어서도 이 시스템을 이용해 학생의 활동을 지원했다. 다음은 본격적인 e-Learning 시스템을 이용해 대학수업에 이용했다. 또한 「외국인아동을 위한 교재 개발과 학습지원 프로그램」에 대해서도 이 시스템이 이용되고 있다. 이번에는 진주교육대학교와 본 대학교에 교류에 있어서도 이 시스템을 활용한 활동이 계획 되고 있다.

## 1. 背景

筆者らは2002年度より主に学長裁量経費を用い e-Learning に関する研究を行ってきた。

e-Learning と遠隔教育は、そもそもの定義が異なるが、e-Learning を遠隔教育の一種と捉える向きは多いと考えられる。遠隔教育の最初のもののはっきりしないが、1830 年代に米国で「独立学習」と呼ばれたもの等がある。これらは、物理的な距離が離れている等して通学することが難しい受講者に対しても教育を可能とするものである(Moore et. al, 1996)。初期の e-Learning の研究も、この流れを汲み、まさに物理的な距離を超えて学習を可能とするとするものが多かった。特にビジネスにおいては、これによるコストの削減に注目したものも多かった。

しかし近年、特にわが国ではこうした考え方はやや後退し、Blended Learning と呼ばれるものが増えてきたようである。これは、従来型の対面式による授業も運営する中で、さらに e-Learning を活用して、学習の質的な向上を図ろうというものである(岡本ら, 2004)。2005 年度のデータによると本学の学部入試の合格者は、愛知県・岐阜県・三重県の東海三県で 895 名に上り、全合格者 1021 名と比べると約 88%に達している。すなわち本学は全国から学生を集める大学と言うより、地域に密着して教育を行う大学と考えられる。



こうした中で、本学の目指す e-Learning は、いわゆる遠隔教育というより、Blended Learning と考えるのが自然である。

よって筆者らは、この考えに立ち、本学における e-Learning のあり方を中心として研究を行ってきた。

## 2. 経緯

### 2. 1. SWMS から

筆者らは、Six Apart 社の Movable Type という Blog のシステムを中心に、不足する機能などを追加で開発して構成し、これを SWMS(School Web Management System)と呼称した(野崎ら, 2003)(江島ら, 2003)(梅田ら, 2003)(Umeda et al., 2003)。

このシステムを、附属岡崎中学校の追究旅行や附属岡崎小学校の米国パリス校交流訪問、さらに附属岡崎中学校と額田町立額田中学校におけるマレーシア スリ KL 校訪問で活用してきた。これらの実践は、いずれも e-Learning のシステムがなければ行えないというものではない。しかし e-Learning を用いると、より充実した教育が行えるということを目指したものである。

これらについては、別途報告書等にまとめているのでご覧いただきたい(平田ら, 2005)。またこれら実践は、Six Apart 社の Web でも紹介された。

### 2. 2. 「かきつばた」へ

筆者らは、SWMS が一定の成果を挙げたと考え、さらに次のステップとして本格的な e-Learning システムを導入することとした。

そこで 2004 年後期より、moodle と呼ばれるシステムを採用した。moodle を採用した理由は概ね以下の通り。

- (1) フリー(正確には GNU GENERAL PUBLIC LICENSE による)のシステムであり、初期コストを比較的安く抑えることができる。
- (2) 比較的安価なハードウェアで動作させることができるよう設計されており、ランニングコストも比較的安く抑えることができると期待できる。
- (3) すでに評価の高い e-Learning システムである WebCT を開発したスタッフにより基本的なシステムが設計されており、期待できる。
- (4) 当初より多国語対応がされており、筆者らが国際交流での活用を視野に入れていたことから、向いていると考えられる。

筆者らはこれを「かきつばたⅢ」と呼称した。

当初授業 4 つ程度での活用を行い、提示資料のアップロードや、受講者との課題のやり取り等に利用した。また一部の授業では受講者間の相互評価や試験等でも活用した。

2005 年度は 18 の授業で 500 名以上の受講生に活用しており、その中には現代的教育ニ

ーズ取組支援プログラム（現代 GP）に採択された「外国人児童生徒のための教材開発と学習支援プログラム」によるものも含まれている。ここれでは系・課程・専攻や年次の異なる受講者や教員が、相互にコミュニケーションを持ちながら授業を推進することに活用されている。

当初用意したハードウェアは、筆者らの予想を遥かに超える利用の広がりに対応できず、2005年8月により高機能なハードウェアに置換した。

### 3. 国際交流と e-Learning

#### 3. 1. Mission to Korea 2005 における活用

近年、学校の情報化ならびに国際化への対応が広く求められている(文部科学省, 2004)。すでに筆者らは、上記のように附属岡崎小学校や中学校において、国際的な交流を視野に入れた e-Learning の活用を行ってきた。しかしこれらは、いずれも短期間での活用であり、長期に渡るものではない。また筆者らは、附属学校園にはそれぞれ事情もあり、長期的な活用を行うには色々と困難な点も多いと考えた。そこで大学における e-Learning の活用を検討することにした。

少し順序が前後するが、まず附属岡崎小学校や中学校での実践で使われた手法を再度大学に用いることにした。

2005年5月10日から、大韓民国 晋州教育大学校との交流事業「Mission to Korea 2005」の実践を支援することを目的として、上記システムを活用した Blog を設置し、学生らのコミュニケーションを円滑に行うために利用した。

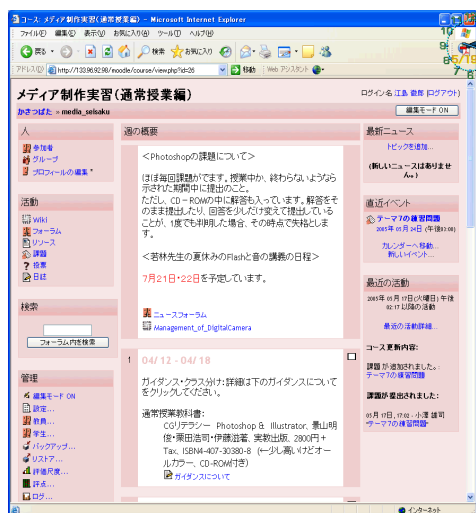


図 1: 「かきつばたⅢ」の画面



図 2 Blog 「Mission To Korea 2005」

### 3. 2. 教員養成における e-Learning の活用を目指して

国際的な視野を持ち、情報化に対応できる教員の養成が求められていることは議論を待たない。筆者らは、これらに対応するために、「かきつばたⅢ」を活用することを検討した。そこで、すでに大韓民国 晋州教育大学校と本学で行われている交流事業に着目し、これと e-Learning によって、上記のような教員の養成が可能であると考えた。

そこで基本的な考え方をまとめ、2005 年 5 月 19 日に、訪日された大韓民国晋州教育大学校 李榮晩先生に「IT を活用した実践的遠隔教育(e-Learning)」として提案【別紙参照】を行った。

これを李先生が持ち帰られて検討された結果、筆者らは 8 月 21 日(日)～24 日(水)と 9 月 9 日(金)～11 日(日)の 2 回に渡り訪韓することになった。

訪韓の目的は次の通り。

- (1) 筆者らが晋州教育大学校と本学で行われている交流を把握する。
- (2) 晋州教育大学校の教員と事業の可能性を検討する。

これら訪韓により、筆者らは以下のようなアウトラインを描くに至った。

- (1) 日韓の大学生が相互に連携してひとつの授業を完成させる。これにより受講者は、それぞれの国の文化や習慣、教育等の違いをお互いが理解することができ、国際化の推進に貢献する。
- (2) 上記を支援するシステムとして e-Learning を用いる。これにより受講者は、一定の水準の情報リテラシーを得ることができ、情報化の推進に貢献する。



図 3 : 大韓民国 山清初等学校で授業をする本学学生たち

#### 4. 今後の展開

2006年度は、これまでの経緯を踏まえ、これら国際交流を実際に行う年度と位置付けている。すでに情報教育課程の学生1名が2006年3月から大韓民国 晋州教育大学校への留学を決定している。この学生は「Mission To Korea 2005」のBlogでも中心的な役割を果たしている。

また e-Learning システム「かきつばたⅢ」は、2006年3月にさらにハードウェアを増強することが決まっている。また設置場所等も変更する予定である。現在この準備中である。

#### 参考文献

- (1) Michael G. Moore, Greg Kearsley, Distance Education : A systems View, Wadsworth(1996)
- (2) Kyoko Umeda, Tetsuro Ejima et al. “A Development of a School Website Management System and a Trial during the Investigation Trip of a Junior High School”, Proc of ICCE2003, pp770-774 (2003)
- (3) 梅田恭子他, SWMS を用いた中学校の追究旅行のための Web サイト作成とその実践, 教育システム情報学会 第 28 回 全国大会 講演論文集, pp97-98(2003)
- (4) 江島徹郎他, 学校の生徒や保護者専用の Web ページシステムの開発と, それによる交流の実践, 教育システム情報学会 第 28 回 全国大会 講演論文集, pp93-94(2003)
- (5) 岡本敏雄・小松秀罔・香山瑞恵, e ラーニングの理論と実際 システム技術から, 教え・学び, ビジネスとの統合まで, 丸善(2004)
- (6) 平田賢一他, E-Learning 実験プロジェクト (最終報告), 愛知教育大学(2004)
- (7) 野崎浩成他, 附属学校と大学との学術的交流の強化を目指した E-Learning 実験プロジェクト, 教育システム情報学会 第 28 回 全国大会 講演論文集, pp89-90(2003)
- (8) 文部科学省, 平成 15 年度「文部科学白書」, 文部科学省(2004)

## 別紙

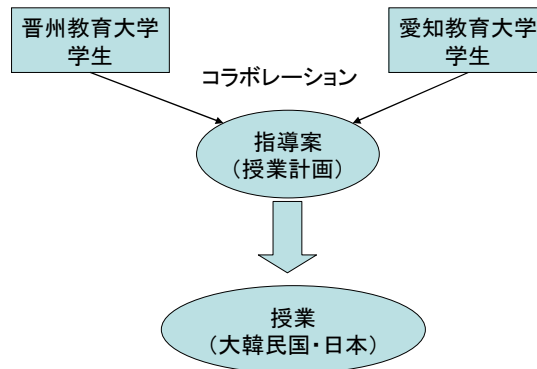
### IT を活用した実践的遠隔教育(e-Learning)企画案

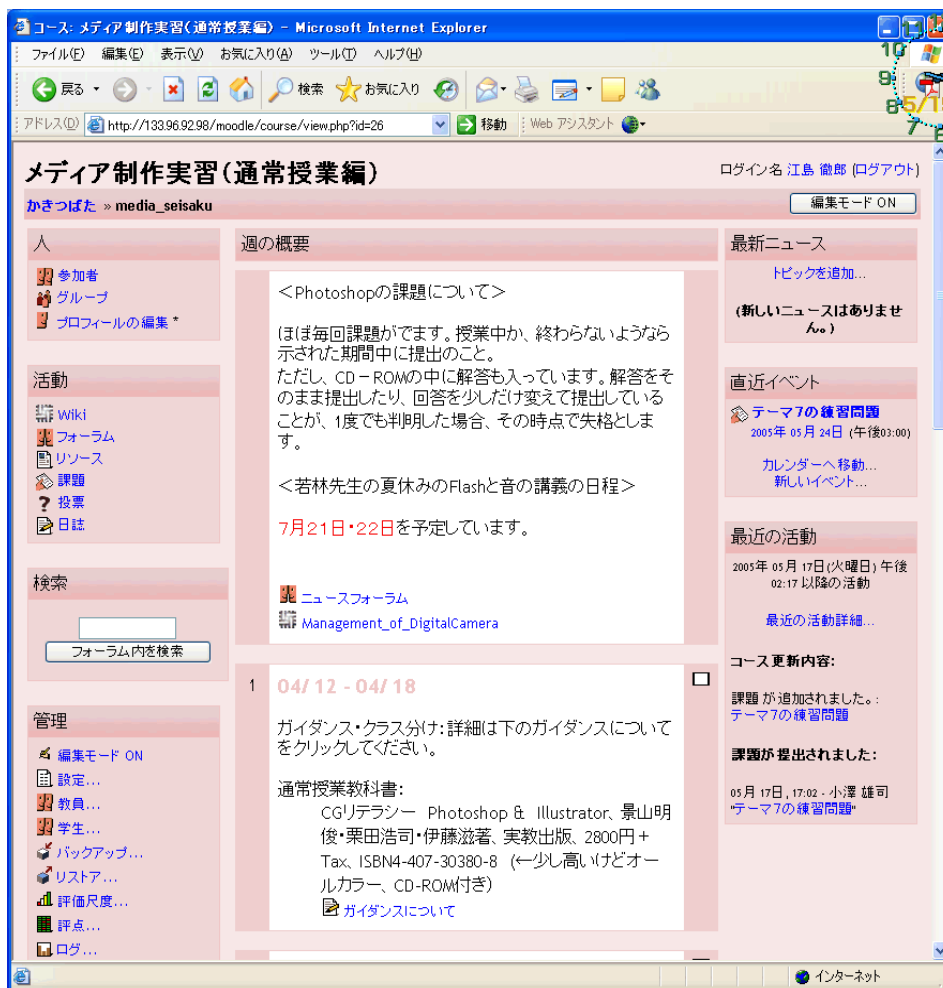
愛知教育大学 情報教育講座 野崎浩成・江島徹郎・梅田恭子

1. 目的 多文化共生教育について幅広い視野を持つ教員の育成
2. 時期 概ね 2005 年 9 月～2008 年 3 月まで
3. 場所 大韓民国 晋州教育大学校 等と本学ならびに本学附属学校園
4. 内容 インターネットを利用した e-Learning システム(SWMS : School Web Management System)等を活用した交流と授業実践

本学の学生(主に大学院・学部)の連携による 6 年一貫コースの学生)から選抜された数名程度が、貴大学の学生と協力して授業実践を行う。

そのための指導案等の作成に e-Learning システム等を活用する。





## 5. 予算とその根拠

本学 学長裁量経費

公募「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」3年以内、30,000千円以内

## 6. 参考

- (1) 野崎浩成他, 附属学校と大学との学術的交流の強化を目指した E-Learning 実験プロジェクト, 教育システム情報学会 第28回 全国大会 講演論文集, pp89-90(2003)
- (2) 江島徹郎他, 学校の生徒や保護者専用の Web ページシステムの開発と, それによる交流の実践, 教育システム情報学会 第28回 全国大会 講演論文集, pp93-94(2003)
- (3) 梅田恭子他, SWMS を用いた中学校の追究旅行のための Web サイト作成とその実践, 教育システム情報学会 第28回 全国大会 講演論文集, pp97-98(2003)
- (4) Kyoko Umeda, Tetsuro Ejima et al. "A Development of a School Website Management System and a Trial during the Investigation Trip of a Junior High School", Proc of ICCE2003, pp770-774 (2003)

## おわりに：お礼と学生への期待を込めて

教務企画担当理事

鈴木 眞雄

1997年5月に、韓国晋州教育大学校と交流協定を結んで以来、06年5月には、遂に9年目を迎えることになる。晋州教育大学校との交流は、95年の夏に、本学に飛び込んできた1通のファクシミリから始まり、その対応においての本学への元教員研究留学生の仲介により、最初の交流が始まった。その後、晋州からの教員の受け入れ、研究留学生受け入れへと着実に進展してきたのである。しかし、教員、学生・大学院生の交流は、いずれも晋州教育大学校から本学に留学してくれたことから始まり、いわば一方向の交流であった。暫くは、国際交流基金による受入れと、晋州教育大学校の基金によって毎年1名の学生の受け入れて貰うという状態が暫き、多くの学生の双方向の交流は実現しなかった。

本年度の学長経費による学生・院生の交流事業は、昨年度のユネスコの支援による10名の学生の訪問に端を発している。両大学の交流の成果を、将来にまで継続させ、その成果を生かして続けていくなれば、これまで以上に、学生の交流、特に院生の交流に力が注がれるべきであると判断して企画を申請したのである。交流の中身については、いろいろと検討を重ねて来た結果、「学生が中心の大学祭に音楽活動や模擬店等の交流活動を組込むことが、必要不可欠である」と交流の経験を通じて実感した。これまでの細くて長い交流活動も、大学祭の交流から、大学間の授業を通じ、さらには附設（附属）小学校での授業の体験、さらには近隣の一般の小学校の児童との交流へと活動の輪は広がってきたのである。

今回の交流、特に学生・院生の交流においては、本学が06年より始める「6年一貫」コースの総合演習Ⅲの「海外の交流協定大学での研修」の実現可能性を探り、さらに、この演習の具体的内容の検討のきっかけを見出すことにあった。このために、晋州教育大学校の附設小学校と一般の小学校での試行的研修を、強くお願いした。その内容については、学生が中心になって作り上げた「日韓教育文化通信使」のシンポジウムにおいて紹介されたのでここでは、詳しくは述べないが、「山清小学校」での訪問は、韓国の科学教育「発明家を養成する教育」の実態を体験し、学生自身が韓国の小学校教育の現状を体験した。例えば、伝統的な踊りを教える舞踊室、保健の授業ができる保健室、席についた順に食べてしまう給食等、驚きの連続であった。

最後に、韓国の教員養成制度についてみると、日本のように大学で教職に関連する単位を積み上げ教育委員会が認定するものではなく、大学が教員として適格であると認定するのである。この制度を支えているものに大学が独自のカリキュラムを作り、厳格な評価制度の存在がある。一般校に学部学生の教育実習を受け入れてもらう（受け入れさせる）ためにも、大学が小学校を評価し、受け入れの可否を判断するというものであった。改めて韓国の教員養成大学の使命の大きさ、重さを痛感した。

このプロジェクトの実現に多くの方々のご支援を頂いたこと、ここに改めてお礼を申し上げると共に、この研修に参加した学生が次の時代の日韓交流において力を発揮してくれることを期待する次第である。

この9年の間には、日本と韓国の政治レベルでは、解決の難しい問題が立て続けに生じ、両校の交流も、交流が円滑に進まない事態を体験したこともあった。しかし、民間レベルでは、「韓流ブーム」と称されるほどの交流が竜巻のように起きて、表面的であるとはいえ、普通人の交流が日常的になった。言い換えるならば、日本と韓国の交流は、激流と涸の繰り返しで、当分の間はこの繰り返しが続くものの、交流の量と質が右肩上がりになることは予想に難くない。

このように自前の基金を持たない本学であるからこそ、大学間の交流の基本は「派遣と滞在に関する費用」は、自前であることが前提で、基本的には相手に負担を求めないことを暗黙の了解としてきた。このようなことを暗黙の前提とする交流協定が締結されたからこそ、これまで交流が続いてきたのであると断言できる。

## 맺음말 인사말과 학생여러분에 대한 기대

교무기획담당이사  
스즈끼 마사오

1997년 5월에 한국진주교육대학교와 교류협정을 맺은 후로부터 2006년 5월이면 벌써 9년째를 맞이하게 됩니다.진주교육대학교와의 교류는 95년의 여름, 우리 학교에 보내온 한통의 팩시밀리가 계기로 시작되어 그것에 대응해 선배인 교원연구유학생을 중매자로 처음의 교류가 시작되었습니다.그후, 진주의 교원을 받아들이고,연구유학생을 받아들이는 과정을 거쳐 착실하게 발전하여 왔습니다.하지만 교원, 학생, 대학원생의 교류는 모두 진주교육대학교에서 저희 학교에 유학오는 일방적인 교류였습니다.그때는 국제교류기금에 의한 유학과 진주교육대학교기금에 의한 매년 한명의 유학생을 받아들이는 상태가 계속되었고, 두 나라 학생 쌍방의 교류는 실현 하지 않았습니다.

금년도의 학장경비에 의한 학생, 대학원생의 교류사업은 작년도의 유네스코의 지원에 의해 10명정도가 방문을 할 수 있습니다.두 나라 대학의 교류의 성과를 장래의 문화교류에도 활용하여 학생의 교류, 특히는 대학원생의 교류에 예전보다 훨씬 힘을 넣어야 할 것이라고 판단하여 기획을 신청한 것입니다. 교류의 내용에 대해서는 여러가지로 검토한 결과, 학생이 중심으로 진행하는 대학축제에 음악활동이나 모의점 등 교류활동을 편입하는 것은 필요불가결하다는 것을 교류의 경험을 통해 실감하였습니다.여태까지 해 온 좁고 긴 교류활동도 대학축제의 교류로부터 대학간의



수업을 통해, 그 위에 부설소학교에서의 수업체험 그리고, 가까운 이웃 소학교와의 어린이들의 교류로 활동의 범위를 넓혀 왔습니다.

이번의 교류, 특히는 학생, 대학원생의 교류에 있어서는 우리 학교가 2006 년부터 시작하게 되는 「6 년일관>>방침의 「종합연습Ⅲ>>의 「해외의 교류협정대학에서의 연수의 실현>>의 가능성을 찾고, 그 위에 연습의 구체적내용의 검토의 계기를 찾아 내는 것이었습니다. 그것을 위하여 진주교육대학교의 부설소학교와 일반소학교와의 시행 연수가 될 수 있게끔 간절히 부탁드립니다. 그 내용에 대해서는 학생이 중심이 되어 만들어 낸 「한일교육문화통신사>>의 심포지움에 대해 소개되었기때문에 상세하게 설명해 드리지 못하겠지만, 산청소학교에서의 방문은 「한국 과학교육발명가를 양성하는 교육」의 실태를 체험하고, 학생들이 스스로 한국의 소학교교육의 현상태를 체험했습니다. 예를 들면 전통적무용을 배울 수 있는 무용실, 보건의습을 받을 수 있는 보건실, 자리에 앉은 차례로 급식을 먹는 등 놀람의 연속이 었습니다.

마지막으로 한국의 교원양성제도에 대해 말씀드리자면 일본처럼 대학에서 교직에 관련되는 단위를 취득한 후 교육위원회가 인정하는 것이 아니라, 대학이 교원으로서 적격인가 아닌가를 인정하는 것입니다. 이 제도를 지지하고 있는 것에 대학이 독자의 교육 과정을 만들어 내고, 엄격한 평가제도가 존재하고 있는 것입니다. 일반 학교에 학부학생의 교육실습을 받아들이게 하기 위해서도 대학이 소학교를 평가하고, 받아들이나, 받아들이지 않느냐를 판단하는 것이었습니다. 한국의 교원양성대학의 사명의 크기와 무게를 새삼스럽게 통감했습니다.

이 연구 과제의 실현에 많은 분들의 지지를 받은 감사의 마음을 다시 한번 인사드립니다. 동시에, 이 연수에 참가한 학생이 다음 세대의 한일 교류에 있어서 힘을 발휘할 수 있게끔 기대하는 바입니다.

이 9 년동안에는 한국과 일본의 정치 수준에서 해결하기 어려운 문제가 계속 발생하고 있고, 두 나라의 대학의 교류도 원활하게 진행되지 못한 사태를 체험한적도 있었습니다. 그러나 민간 수준에서는 「한류붐>>이라고 불리우는 교류가 급류처럼 일어나고 표면적이기는 하지만 일반 사람들의 교류는 일상적인 것으로 되었습니다. 다시 말씀드리자면 한국과 일본의 교류는 격류와 소용돌이 처럼 반복되어, 당분간은 이 반복이 계속 되겠지만 교류의 양과 질이 점점 높아질 것은 더 말할 바가 없습니다.

우리 학교는 이렇게 자기 부담 기금을 갖고 있지 않기 때문에 대학간의 교류의 기본은 「과건과 체제에 관한 비용>>은 자기 부담이 전제로, 상대방에게 부담을 요구하지 않는 것을 암묵의 양해로서 인식하여 왔습니다. 이렇게 암묵을 전제로 한 교류협정이 맺어 졌기때문에 교류가 여태까지 계속되어 왔다고 단언 할 수 있습니다.